

『応援したい』想いが奈良と群馬をつなぐ ～伊藤時男さんとの対話企画 支援協が開催～



奈良県精神障害者地域生活支援団体協議会（通称：支援協）のつくる会が主催する『伊藤時男さんとの対話企画』が、2月20日に開催されました。対話企画は、支援協のスタッフを伊藤さんのお住まいである群馬県太田市にインタビュアーとして派遣し、リモートで奈良県の当事者をつなぐという方法で実施されました。当日は、当事者や家族、支援者、学生など95人の参加がありました。

企画内容は、前半の1時間は伊藤さんを取り上げたNHKのドキュメンタリー番組『長すぎた入院』を視聴しました。後半は、伊藤さんと奈良県の当事者のリモートでの対話を行いました。

1. 退院できないのは経営的な判断？

伊藤さんは現在73歳。人生のうち45年を精神科病院で入院していました。長期にわたる入院生活。なぜ、伊藤さんは退院できなかったのか。

伊藤さん自身は「継母との関係が悪かったのもあって、家族が退院を認めてくれなかった」と話します。しかし、伊藤さんのお話で印象に残ったのは「雇われの医師から、経営者の医師へ院長が交代したことがあった。そのときに『雇われの医師から経営者の医師に院長が代わったら退院できなくなる』という噂が病院の中であった」「前任の雇われ院長もそれを見越して、自分を退院させようとしてくれた」「いろいろあってその時は退院できなかったが、結局、噂の通りになってしまった」というエピソードです。

興味深いのは雇われ院長から経営者の医師に院長が代わることで、患者が退院できなくなるという認識が、入院患者も含む院内の人たちに共有されていたことです。伊藤さんのお話からは、退院の判断が純粋な治療ではなく、経営的な判断に影響されることが分かります。

2. あきらめない、けれども…

それでも、伊藤さんは退院をあきらめませんでした。東京で初めて入院した際に「働けるようになれば退院できた」という経験がありました。そのため、福島病院に入院している時も、退院のために院外作業に熱心に取り組みます。病院の近くにある養鶏場や、病院内の給食の仕事をそれぞれ10年以上取り組みました。それでも退院できません。そのため「何のためにやっているか分からなく」なって、院外作業を辞めてしまうこともあったそうです。

院外作業で得られる収入は、一日800円程度。そのうち半分は、病院のレクレーションなどの積立金として病院に天引きされます。残ったお金も病院に預けることになってしまいます。伊藤さんは「東日本大震災で病院から出ることになったけど、結局、病院に預けていた院外作業の給料がどうなったのか分からない。

うやむやになってしまった」「病院の職員からは、一時期 10 万円以上はあると聞いてただけど」と話します。

「退院できる」と信じて一生懸命働き続けたのに退院できない。しかも、わずかばかりの給料も、どこに行ってしまったのか分からない。夢も希望もないとはこのことです。こんな残酷なことがあるのかと胸が痛みました。

3. 退院。友達が支えになっている

伊藤さんが退院できた直接の要因は東日本大震災です。伊藤さんは「地震が来て病院が被災した。天井から水が噴き出して 30 センチくらい水が溜まって、住めなくなった」と言います。その後、茨城の病院へ移り、様々な経緯があって、群馬県太田市のグループホームに退院できました。

退院できた時の気持ちを伊藤さんは「嬉しかったよ」と率直に表現をします。一番嬉しかったのは「自由ができた」こと。「自分の部屋もできたし。それも嬉しかった」と言います。さらに退院して良かったこととして「友達をたくさん作れたこと」を挙げます。伊藤さんの友達づくりの方法は、居



酒屋やカラオケスナックに行ってお店の人やお客さんと仲良くなることです。ただ、伊藤さんは「お酒は飲まないんだよ」と言います。酒場でお酒を飲まずに友達を作れる伊藤さんに脱帽です。

今ではグループホームを卒業し、アパートで单身生活をしている伊藤さん。自炊もこなしています。対話企画が始まる前も「晩御飯はカレーを作ろうかな」と話していました。退院後は再入院もなく、順調に一人暮らしを続けています。伊藤さんは「たくさん友達ができたから、それが支えになっている」と言います。周囲の支えを受けながら、楽しそうに日々の暮らしを話す伊藤さん。そんな伊藤さんと対面して、改めて「なぜ 40 年以上も入院せざるを得なかったか」という想いが頭をもたげます。

「誰が」「何のために」伊藤さんを精神病院に閉じ込めたのか。そして、伊藤さんの 45 年に誰が責任を取るのでしょうか。伊藤さんの裁判は、それを明らかにするための裁判なのだと感じます。

4. 裁判。自分が先駆けになる

質疑応答では、伊藤さんに対して、奈良県の当事者から、精神医療国家賠償請求訴訟を提起した理由について質問がありました。伊藤さん自身も含めて「何のこともない人が、たくさん入院していた。自分よりも長く 50 年入院している人もいた」「自分は退院できたけど、入院中に自殺した人もいる」「その人たちのことを想って『自分が先駆けになろう』と考えた」と話します。伊藤さんの言葉の端々からは、自分だけのためじゃない、同じ境遇で被害を受けた人たちのために闘いたいという想いが強く感じられました。

また、裁判での勝算を問う質問に対しても「勝ち負けだけじゃない」ときっぱりと言い切りました。伊藤さんは裁判がどうなるか分からなくても、自分自身が訴え出ることの意義を説きます。同じ境遇の当事者たちの想いを背負っているからでしょう。だから何度も「先駆けになるんだ」と繰り返します。改めて伊藤さんの決意を伺い「応援したい」という気持ちを強くしました。

今回の対面企画は、冒頭でもお伝えしたように 100 人近くの参加者が集まりました。その半数以上が当事者です。今回の企画を通して奈良県の当事者と伊藤時男さんが直接交流できたことは、とても意義のあることだと思います。質疑応答でも、奈良県の当事者から、たくさんの質問が出ていました。

今回、社会福祉法人アルカディアの方々には、場所やリモート設備の提供など、全面的にご協力いただきました。管理者の片平哲也氏を筆頭にアルカディアの皆様のご協力なしには、この企画は成功しなかったと言っても過言ではありません。この場をお借りしてお礼を申し上げます。誠にありがとうございます。

ました。

奈良県では支援協なども参加して「精神医療国家賠償請求訴訟を応援する奈良県民の会」を立ち上げています。私たちはこれからも伊藤時男さんの裁判を応援していきます。そして、またいつの日か伊藤さんとも再会できる日を心待ちにしています。対話企画にご協力いただき、誠にありがとうございました。（高橋健太）

原告、会員、賛助会員、応援団募集中

まずはホームページをご覧ください、『知ること』からご協力ください。

<https://seishinkokubai.net/>

研究会への入会は上記 URL（右 QR コードをご活用ください）より行うことができます。

